

誘導換羽法による採卵種鶏供用期間の延長技術に関する予備的検討

○山本力也¹・山本忠博¹・阿部慶和¹・浅井文吾¹・岡村裕¹・安藤学²・美濃口直和²・筒井真理子¹
(¹家改セ、²愛知農総試)

〔目的〕一般的に種鶏は産卵率、受精率等の繁殖性能を考慮し、長期利用を目的とした人為的な休産処理(以後「誘導換羽法」)を行わず、約 70 週齢で更新されており、特に採卵種鶏については、誘導換羽法に係る知見が極めて乏しい現状にある。我々は今回、採卵種鶏の供用可能期間の延長技術を確立する目的で、比較的鶏に与えるストレスが少ないとされる低エネルギー飼料給与法を含め、誘導換羽法についての予備的検討を実施した。〔方法〕ロードアイランドレッド種(種鶏：試験開始時約 62 週齢)を各 90 羽ずつ 3 区(絶食区、低エネルギー飼料区及び対照区)に割り当て、採卵鶏用ケージに 1 羽ずつ収容した。絶食区は体重と産卵率を指標に 14 日間絶食させた後、6 日間かけて復食させた。低エネルギー飼料区はふすま主体飼料を体重と産卵率を指標に 18 日間制限給餌(1 羽あたり 30 g/日)し、3 日間かけて復食させた。対照区は試

験前と同様の不断給餌を継続した。いずれの区も点灯時間は 14 時間とした。産卵再開後、一ヶ月間隔で、卵質検査(ハウユニット、卵殻強度)と卵重測定を行った。また、人工授精を行い、繁殖性能(受精率、ふ化率等)を調査した。〔結果〕絶食区は 14 日で、産卵率 0 %、平均体重 24.3 % 減となった。復食の結果、産卵率は 32 日で試験前の水準に復帰した。低エネルギー飼料区は 16 日で産卵率 1 %、平均体重 20.9 % 減となった。復食の結果、産卵率は 33 日で試験前の水準に復帰した。これらの区は対照区と比較して、明らかに産卵率及び卵質が改善し($P<0.05$)、誘導換羽法が採卵種鶏にも応用可能であることが示唆された。しかし、繁殖性能については、改善効果を統計学的に明らかにできなかったことから調査の方法を再検討すべきことが明らかとなった。

誘導換羽法による採卵種鶏供用期間の延長技術に関する予備的検討

○山本力也¹・山本忠博¹・阿部慶和¹・浅井文吾¹・岡村裕¹・安藤学²・美濃口直和²・筒井真理子¹（¹家改セ、²愛知農総試）

演題希望分類：飼料・栄養

（遺伝・育種、繁殖・生理、疾病、飼料・栄養、経営・管理・畜産物利用、より選択する。）

優秀発表賞の対象者：

（講演者が発表時点で満 30 歳以下の場合は、◎印を付ける。）